



エッセイ：特集——記憶を育む／記憶と向き合う：子どものことばの実践を捉え直す

移動とことばの記憶, 音の記憶

複数言語とともに成長したある女性の語りを聞いて

川上 郁雄 *

© 2025. 移動する子どもフォーラム. <http://gsjal.jp/childforum/>

1. Aさんからメールが来た

Aさん¹から私のもとに突然メールが来た。2022年8月のことである。そのメールには、Aさんが子どもの頃にニューヨークに行った時の体験をアカデミックに説明するとしたらどのようなのか相談したいという内容だった。

Zoomを使って話をしましょうと提案し、Aさんの話を聞いた。彼女の思い出とは、次のような内容だった。8歳の時に父親と兄が住むニューヨークの家を訪ねる機会があった。朝起きると、誰もまだ起きていなかった。その静寂の中、何もことばが出なくなった。静寂の中で続く沈黙。それは学問的にいう「沈黙期間：silent period」なのかどうか、知りたいという内容だった。

「沈黙期間」とは子どもが母語とは異なる言語に接した時などに、言葉を発しない／言葉を発しなくなる時期をいうのだが、そのような一般的な説明をしても、画面越しに映るAさんの表情は硬いまだだった。

Aさんはアメリカ人の父と日本人の母のもと、アメリカのニューオリンズで生まれた。その後6歳までアメリカのニューヨークで暮らしていて、母親を「お母さん」と呼ぶ以外は、すべて英語を使っていた。6歳以降、日本で暮らすようになってからは英語を使わず日本語を使おうと苦労した

* 早稲田大学名誉教授 (Eメール: kawakami@waseda.jp)

1 本稿ではAさんの同意を得て、匿名とする。

と以前話していた。

Aさんは、日本で暮らし日本語漬けだった8歳の時にニューヨークを訪ね、再び英語の世界に入った時の体験を、20年以上経ち30代の社会人となってから思い出し、その体験の意味を求めていた。

私は、Aさんとリモートで話しながら、Aさんの気持ちをうまく受け止められず、戸惑いすら感じていた。成人したAさんが子どもの頃の体験を思い出し、その意味を考えようとしていることが、私には不思議に思えたからだ。

複数言語環境で成長し、移動を経験した人が自分の子ども時代の記憶と向き合うことは、どのような意味があるのだろうか。そのことを考えたいと思い、2025年3月に、今度は私からAさんにリモートによるインタビューを依頼した。

2. 2025年3月のインタビュー

私が初めてAさんに会ったのは、2009年3月10日だった。Aさんが小学生の時に書いた作文を読み、私は衝撃を受けた。私の研究テーマが子どもの視点からみずみずしく書かれてあったからだ。そこで、直接話を聞きたいと思い、私はAさんにインタビューを申し込んだ。その当時、Aさんは高校2年生だった。学校帰りに制服のまま、私の研究室に来てくれて、私の質問に冷静に、かつ率直に答えてくれた。幼少期のアメリカの思い出、日本での日本語学習、中学校の英語、自身の中の日本とアメリカなど、高校生の時点での思い出について語ってくれた。Aさんの語りは、幼少期より移動と複数言語を経験した人の成長期の自己認識として貴重な語りであった。

その後も私は何度かAさんと会い、交流を続けてきた。今回のインタビューでは、2022年にAさんが私に聞いたかった「沈黙期間」のことを最初に話題にした²。

2. 1. ニューヨークのある朝の記憶

— 3年前（2022年）に話してくれたことについて、再度、話してくれませんか。

A: 父と兄がいるニューヨークの家に冬休みに訪ねて行ったんですが、到着した翌日かその次の日、寒い朝でした。父も兄も起きてこなくて、自分がリビングの方に入って行って、母の

2 インタビューは2025年3月19日に1時間半ほど行われた。Aさんの同意を得て、録音し、のちに文字起こしした原稿を確認してもらった。

置いていったマンガを見ながら、家族が誰も起きてこない、誰も話す相手がいないという、あの独特の静けさ、緊張感、言いようがない不思議な孤独感に包まれ、その中で何なんだろう、この感覚って。英語も日本語もぜんぜん何もことばが自分の中にないみたいな感覚になりました。たぶん、夢を見ているときみたいな感覚かなと思うんですけど。

— そのことを、大人になってから思い出されたのですか？

A: そうですね。3年前はよく思い出していました。(Aさんは当時、ドキュメンタリーを撮る映像制作にも興味を持つようになった頃だった。)

で、なんで映像を撮ろうと思ったかと言えば、4年前の夏に急に仕事がなくなったんです。レギュラーの仕事が全部終わっちゃって、半年間スケジュールが真っ白だったんです。

その半年の間に、これから生きていけないのかなあとか、自分のことを思ったりした。憧れだったけどできるわけないと思っていたテレビ・ディレクターにも挑戦してみようかと考えた。

ドキュメンタリーを撮ってみたいと思って、自分の原点とか全部見つめ直してみようと思って。自分にしかない感覚って何だろうと考えているとき、あのアメリカに行ったときの、ことばがなくなった感覚かなあと思ったという経緯がありました。

— そこで、子ども時代のことを思い出したんですね。

A: ええ、あの時を思い出したんですね。すごく孤独なのに、独特の温かさがある記憶だなあと思ったんです。たぶん、子どもの時は不安だったんですが、大人になって、どこかに所属して、誰かに認めてもらわないと生きていけないみたいなことを考えていた時だから、そんな中で、私にしかわからない感覚っていうのが多分、幼い自分がその中で凜として立っていた、それが自分を元気づけてくれる感じもしたし。

どこかに所属して、誰かに認められて、どうやって生きていくんだろうと考える中で、そういう概念を全部取っ払ってくれるような、自分にしかない体験っていうのが、自分だけがわかっているものがちゃんとあるっていうのが、温かく感じ、安心したっていうか、あったかい感じがしたんです。

ただ、それを母に少し話したら、それは silent periodという言葉が言われたとき、ああ、それに名前があるんだとか、同じ現象が私以外の人にもあるのかと思ったとき、それも同時に嬉しかった記憶もある。

— 8歳の頃の記憶が、自分のことを考えたとき、戻ってくるのはどうしてでしょうね。記憶は他に

もたくさんあると思うけど。なぜ?

A: 自分の根源をたぶん考えていたんだと思うんです。自分はどこから来たとか、これから何をやったらいいんだの前に、そもそも誰なんだみたいな感覚になった時、言葉が出ない、言葉を知らない感覚、ある意味、すべての枠組みとか、すべてのものを取っ払った、自分だけの感覚の上に立っている瞬間という感じで、あそこに自分がいるって思ったんだと思います。

あの一、よく二つ以上の言語を話す人って、その話す言語によって、ちょっと性格が変わるとか言うじゃないですか。私も兄に指摘されたりしていて、それが私は嫌だったんですね。そんなことを言われても、私は嘘をついている感覚でもないしと思いつつ、言語に引っ張られているって感覚も嫌で、自分は自分の性格なのに。

あの、ことばが見つからない感覚って、怖い感覚でもあるんだけど、どの言葉にも縛られていない自分の感覚で立っている感じがして、風通しがいい、自由な感じで、何か勇者みたいに自分があるそこに立っているんだなあと。そして、思い返すときの大人の自分が温かいと感じている。当時の自分が果たしてそう思っていたかどうかはわかりませんが。洞窟に入っていく時とか、雪景色を前に朝日がのぼるのを見るときとか、怖いんだけど、気持ちいいみたいな、私は勇者、みたいな感じになるじゃないですか。それに近い感覚だったかなと思います。

—それが、ドキュメンタリー制作を考えた時のモチーフになったのですね。

A: 私はドキュメンタリーなんか撮ったことがなかったので、題材を自分ならではの思い入れのあるものにしようと考えました。そこで思い出した何にも囚われていない、あの独特な感覚が、私だけにある、私の根源はあそこにある、と仮定しました。で、それをどうしようと考えたら、母から silent period を聞いて、それが響きもカッコいいなと思ったんですね。言葉があるくらいだから、私だけじゃなく、いろんな人がそういう瞬間があったのならば、それをたどるインタビューをしたら、自分って何だったんだと考えたり、いろんなことを思えるようなドキュメンターになるかなと思って。

—その記憶は、大人になっても蘇ってくるということなんでしょうか。

A: ええ。そんな企画を考えていた3年前の時までは、よく思い出していたと思います。

それ以降は、だんだん忙しくなって、忘れていましたけど(笑)。

2. 2. ことばと記憶

— 今は、英語や日本語について、どう思っているんですか。

A: 今は、完全に日本語メインで話していて、英語はかつて話していたらしいみたいな感覚しかないです。英語のものを読む時も勉強する感覚で読むようになっています。周りの日本人よりできるらしいし、th の発音ができないわけではないですけど、何か不思議な癖があるみたいな、できていなさがあるというのは、自分でも認識するようになっています。ただ、それを悲しいとすら思わなくなったという感じですね。

たとえば、20代半ばの頃、アメリカにいた兄から私の発音がおかしいと指摘されたことがあります。ネイティブじゃないことがすぐくわかと指摘され、兄に発音を直されたりしたことがあります。

また大学生の頃、アメリカのニューオリンズに行って、グロサリーストアで買い物したとき、お店の人に「どこの人なの？ フランス人？」とか聞かれたりして、あれ、私の英語って？と思うことがあって、さみしく感じたり、それが私の母語なのにみたいな感覚があったんですけど、今はもう、ないですね、それは。

— 過去の記憶って、今の生活や生き方につながっているのでしょうか。

A: つながってはいますけど、んー、綺麗につながっているわけではなく、いろんな記憶はあるけど、意識が変わったタイミングもあるから、それが今の自分とどうつながっているのか、自分でもまだ整理つかない。

この前、テレビのニュースで、VHS をデータ化するのが最近流行っているニュースをたまたま母と一緒に見たとき、私は英語を話していた時の自分の映像を見たいと母に話したんです。いまだに英語ルーツの自分がわかるような映像があれば見たいなあと思う。

英語が今、感情と結びついている感じがあまりにないので、私は。やっぱり、感情に近いのは日本語なのに、英語で泣いたり怒ったり笑ったりしている自分、あたり前のように感情と言葉がヒュッと英語で行き来している感じや、その構造は途絶えたなあと思うから、それがあった頃の自分を見たいというのはあるんですけど、でも、それだけになりましたね(笑)。

(A さんは、これまでの仕事を通じて多様な背景の方と出会うことがあったという。

その中で、いろいろな人の生き方を見て、人とことばの関係を深く考えるようになったという。その経験を通じて、A さん自身は英語が母語なのに第1言語ではなく

なった感覚が寂しいとは感じなくなったという。そして、次のように話す。)

A: 私の場合、アメリカで生まれて、もともと英語で話していたけど、母と日本に住むようになったから英語を話さず、日本語を話すようになった。結局、そのとき生きている中で自分の生活を、自分が選んだり、時には環境に翻弄されながら、環境が変わったりして言語が変わっていくけど、それだけのことなんだねって。でも、その中にも喜びも哀しみもあるんだけど。

そんなに大きく考えることでもないけど、言語が切り替わることは面白いと思った。(いろいろなコミュニケーション手段を持つ人に出会ったが、) みんなは逞しく未来を見ているところは変わらないなあと考えた。(いろいろな方と話をして) 自分も癒された感覚になりましたね。

2. 3. ニューオリンズの音の記憶

— 最初にお会いしたのは高校2年生の時でしたが、その1年後、東京藝術大学へ入学されましたね。その大学時代の4年間は何だったですか。

A: ハハハ、何でしょうね。芸大を選んだ理由は、とにかく、それこそ、「ルーツ探し」でした。音楽学という学問があるって高校2年生の時に知って、それは面白いなあといい、やってみたいと思ったんです。大学の(卒業)論文もニューオリンズの音楽葬について書いたんですが、自分が生まれたのがニューオリンズで、父がニューオリンズでラジオ局を立ち上げているんです、昔。だから、父の功績が残っている場所で、ニューヨークもまだ記憶にあるけど、ニューオリンズはましてや記憶にない。だけど、父と母が出会った場所で、自分が生まれた。一番記憶がないけど、自分の根源がそこに詰まっているなと思って。

中学生の頃、いわば総合学習のような時間があったんですが、その時ずっとニューオリンズのことを調べていて、それを高校でも何かやってみたいなあといい、どうやら音楽学っていうのがあるらしいと聞いて。ニューオリンズを調べていると、音楽と奴隷の歴史が詰まっているところだから、その勉強って音楽学じゃんと思って。それなら興味を持ってずっとやっていたんですよ。どこか自分と繋がりがあるといい、いくらでもやれたし、その音楽の勉強をするための基礎がクラシックと思えば、クラシックもいくらでも勉強できたんです。

(Aさんは卒業論文研究のため、ニューオリンズでフィールドワークを行った。テーマは音楽葬だった。)

A: 大学生の時にニューオリンズに行ったんですが、成果はそんなになって感じでした。「ルーツ探し」も深められた感じはしませんでした。

— 音楽葬って、お葬式のことですか？

A: ええ、そうです。ファーストライン、セカンドラインという2部構成となっていて、そのお葬式に死生観とか、ニューオリンズやアフリカ由来のものが詰まっていて、それに基督教の融合が見られるし、奴隷制の残りもあるので、ジャズの生まれた土壌だったとも言われていて、ただそれが音楽の実験場みたいになっていた背景もあって、昨今はダンスやヒップホップとかも入ってきて、(私は)地元の人がそれをどう捉えているかとか、今後どうなっていくのかみたいなことを調べたんですけど。それをやった理由はそんなに深いことはなくて、中学の時に、母が家でニューオリンズのCDをかけた時、「これ、知っている!」って私が叫んだんです。それが音楽葬の音楽だったんです。

すごくロマンチックなことを言えば、お腹に入っている赤ちゃんのとき、家の外で葬列が進んでいくとその音が通りから聞こえてくるので、それが記憶にあったんだったら、すごいロマンチックだし、たぶん、ニューヨークに行って、父がレコードを家でかけていて、たまたまその音楽葬の曲たちが私の記憶に残っていたということかもしれませんけど。

— 今日のテーマは記憶だったんですけど、繋がりますね。

A: 確かに、記憶をずっとたどっていたという感じはありますね。

3. 記憶を「記号接地」する

Aさんの語りから私は多くの示唆を受けた。

一つ目は、大人になったAさんが、仕事のスケジュールに空きができ将来への不安を感じ、これからどう生きていくかを考えた時、幼少期の記憶を思い出したという点である。その記憶はそれまでの移動と複数言語に触れたことで生じたものだった。その記憶を辿ると、英語も日本語もない無の時間と空間に、自身が凜として立つ勇者の姿が浮かび、独特の温かさのある記憶だったという。その記憶を思い出したのは、自分の根源を考えていたからだろうとAさんは言う。自分は誰かと思うとき、すべての枠組みを取っ払った自分だけの感覚を考えていた。「温かさのある記憶」とは大人の視点で幼少期の記憶を捉えているからとAさんは言う。記憶は「上書き」されるのだろうが、それは幼少期の記憶を、あるいはその記憶の意味づけを納得のいく形で自分の

身体に「記号接地」(川上, 2024) しようという試みの行為だったのではないだろうか。

二つ目は英語と日本語への思いである。Aさんは「今は、完全に日本語メイン」と語りつつ、一方で、英語の発音を直されたり「フランス人?」と聞かれたりしたことが「英語ルーツ」とか英語が「私の母語」という気持ちに影響し、英語力の低下を20代の頃まで「嫌だなあ」「さみしいなあ」と思う気持ちがずっとあったという。最近は英語が感情と結びついている感覚がなくなってきた。さらに多様な背景を持ち、いろいろなコミュニケーション手段を持ち生きている人を知ることによって自身の移動とことばの変化を受け入れるようになった。「言語が変わっていくけど、それだけのことなんだ」と語る。つまり、複数言語環境で成長した複言語使用者のことばに対する思いは多様な移動の経験と記憶の振り返りを重ねることで大人になってからも変化する動態性があるということである。

三つ目は、胎児のときからの音の記憶である。中学生のときに、生まれた町の音を聞いて「これ、知っている!」と触発され自由研究でニューオリンズを調べたり、高校2年生のときのインタビューでも「今、音楽の勉強をやっている」と楽しそうに話していた。音の記憶はAさんの学びの大きな動機になっていた。ニューオリンズの音楽葬の音の記憶が大学の学びにもつながるが、振り返ればその探究は自身の「ルーツ探し」だったと語る。胎児が母親のお腹の中で足を蹴る動作は胎児の脳の発達を促すし、子どもは言葉を習得する前から身体的な刺激が脳や認知、情動へ働きかけることがわかっている(川上, 2023)。Aさんの音の記憶がニューオリンズの音楽葬の音へ繋がり、自身の「ルーツ探し」と重なると語るのには、音の記憶を自身の中に「記号接地」することを意味するのではないか。「移動する子ども」という経験と記憶が身体性と深く関わりながら、人の生を貫いていく。

「移動する子ども」学を考えるうえで、多くの示唆を受けるインタビューであった。

文献

- 川上郁雄 (2023). 情動の視点から見る「移動する子ども」学『ジャーナル「移動する子どもたち」——ことばの教育を創発する』14, 66-80. <http://hdl.handle.net/2065/0002000760>
- 川上郁雄 (2024). 記号接地問題と「移動する子ども」学『ジャーナル「移動する子どもたち」——ことばの教育を創発する』15, 56-79. <http://hdl.handle.net/2065/0002004500>